



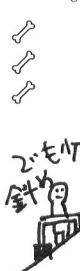
題字「ほねほねボード」前田 団員作

ホネホネ団通信 12号 2011年 1月 23日発行
なにわホネホネ団事務局
〒546-0034
大阪市東住吉区长居公園 1-23 大阪市立自然史博物館
TEL : 06-6697-6221 FAX : 06-6697-6225
wadat@mus-nh.city.osaka.jp

大阪バードフェスティバル出展

ホネホネ団ブース大盛況

平成22年11月20日(土)・21日(日)の2日間、「大阪バードフェスティバル2010」鳥から生物多様性を考える」が大阪市立自然史博物館で開催されました。本拠地でのイベントになにわホネホネ団も参加し、活動紹介やグッズ販売、標本作製実演などを行いました。ナウマンホール入口からトイレ前の広くて人通りも多い非常に恵まれた立地と、団員の皆さんの協力によってホネホネ団のブースも大盛況でした。



上：われらがホネホネ団のブース

活動紹介は、パンフレットやホネ通の配布に加えて、小牧団員のウサギの標本やマッコウクジラ解体の写真を紹介しました。グッズ販売はトリ関係を大幅に強化、売り切れるものも出るほどでした。ちよつと離れた実演ブースでは鳥の仮剥製と骨格標本の作製、私

物標本の展示をしました。さらに会場内各所で白鳥の久保団員をはじめとする多数の団員が客引きパンフレット配布などに励んでくれました。なんでもベテラン団員も誘われたとか。



ほかにも会場内には近大農学部生研骨組やあくあびあ芥川などホネホネ団関係者をあちこちで見かけました。ホネホネ団のブースの向かいにはジュニア自然史倶楽部が店を構え、年少のホネホネ団員たちがぎやかに、激しい売り込みをかけていました。皆様のご協力でもとても盛り上がったイベントとなりました。お疲れ様でした。

佐竹

大阪バードフェスティバル2010

11月20日、21日、ここ自然史博物館で、待ちに待った「大阪バードフェスティバル」が開催されました。2003年から2006年にかけて、博物館で開催された「大阪バードフェスティバル」が2007年に「大阪バードフェスティバル」になったのが始まりだそうです。ちなみに今回のバードフェスティバルには48団体が出展し、来場者数は二日合わせて1万8300人に上るそうです。

バードフェスティバル1日目は、僕はジュニア自然史クラブのブースで羽根のしおりを売りました。向かいのなにわホネホネ団のブー



上：にぎやかなお向かいのジュニア自然史クラブのブースには団員がちらほら

スではイカルと言う鳥の顔が書かれた可愛いバッジを買いました。すぐ近くでは佐竹さんが鳥を剥かれています。なにわホネホネ団のことを知ってもらいたい場だったと思います。その日は1日中ジュニアクラブの手伝いをしていました。



2日目僕はジュニアクラブの羽のしおりを作るために少し早く来たのですが、もうほとんどブースが用意されていたのでびっくりしました。僕は10時半から日本野鳥の会の、バーディという探鳥会に参加して植物園を回りました。橋を渡っている時にオオタカ成鳥が飛んだり、モズの高鳴きを聞いたり盛りだくさんで終わりました。昼はいろいろなブースをまわりました。沢山の望遠鏡や双眼鏡をのぞいてみるのは楽しかったです。コルクの板に焼き目をつけて絵を描くブースも楽しかったです。僕はオオタカの絵を描きました。谷口高司先生の鳥のグッズを買ったりもしました。一番うれしかったのは谷口先生が描いたタカの識別用下敷きです。とても細かく、綺麗でわかりやすいイラストでした。その他、お母さんにオオタカの絵が描かれたTシャツも買ってもらいました。ヒガラやキクイタダキ、キビタキなどの絵が描かれたTシャツもありました。バリエーションが豊富で、特徴を逃さず描かれていて、マニアにはたまらないTシャツでした。和田先生は10枚くらい買っていたそうです。

2時から講堂で「幸せを運ぶ鳥コウノトリ



かエウ着

のイメージの崩壊」という話を聞きました。コウノトリは、スゲなどの柔らかい草の生えた草地のなかに林が小さくまとまってあるような環境を好むそうで、日本の、田んぼの中に屋敷林がまばらにある環境はコウノトリがすみやすいそうです。しかし、コウノトリがなぜ日本からいなくなってしまったかと言うと、コウノトリは狩りがへたなため、農薬によつて死んでしまった魚を大量に食べてしまい、かなりのコウノトリが死んだからだと思います。それでもコウノトリは2003年に豊岡で巣作りをし、今はすこしずつヒナが野外で巣立ち始めているそうです。幼鳥は本州の各地へ分散していくそうです。その他、48パーセントの確率で大安の日に巣立っている、などなどとてもおもしろい話を聞かせていただきました。



最後に谷口高司の卵式鳥絵塾に行きました。ハイロチュウヒを描きました。翼などのバランスが難しかったです。二日間のバードフェスティバルはいろんな面白い所をまわつてとてもおもしろかったです。また来年はもっといろんな所をまわつて楽しもうと思います。とても楽しい2日間でした。

し。ポ。ト。作。者。 杉本ノ

杉本ノ (伸ノ) は しまろ



鳥大好ま超詳しい 中学一年生

「ホネの標本製作講座」ニワトリの

頭骨標本づくり」に参加して

8月22日の日曜日、私は大阪市立自然史博物館の行事である「ホネの標本製作講座」に参加した。今回、製作するのはニワトリの頭骨標本で、もともとは動物園などで肉食獣や猛禽類のエサにするためのものを買ってきたのだそうだ。じつは、去年(2009年)も骨の標本製作講座に参加したのだが、そのときの材料は外来種として駆除されたウシガエルだった。ウシガエルのときは、ヌルヌルしていて生臭いし内臓もたくさんあって気持ち悪かった。あちこちで「うっ」とか「うわっ」とかいう声もあがっていた。お昼ごはんの時間になっても、食欲が出ない人もいた。私もあまり食べられなかった。今回はニワトリの頭だけなので、ウシガエルと比べて小さいし内臓もないのでわりと楽にできるのでは、と思った。



頭には器官や食道といった管状のものがぶら下がっていたり、ぶら下がっていないなかったり…。どれに当たるかによって、少し違っていた。気管がついていたら、ちょっとお得な気分。気管で遊ぶ児童もいて、平気な人は全く平気なのだと思った。とさかを取って皮を剥いて、肉を少しづつそぎ落としていくのだが、小さいから楽だと思ったら大間違いで、

スジや取ってはいけない部分などがあって意外と難しかった。西澤さんが最初にきちんと説明してくれたのだが、実際に作業を進めて行くと「あつ、どのスジだったっけ?」とわからなくなり、手が止まった。西澤さんが各テーブルを回って来てくれるのを待つて質問した。それを皆がやるので、西澤さんも橘さんも何度も説明しなければならなかったと思う。集中してやるうちに自分でどんどん進めてしまい、残しておかないといけない部分もごっそり取ってしまった人もいた。「ああ!でも仕方ないか!」と落胆するおじさん。確かに仕方ない。「覆水盆に返らず」とはこのことだ。



学芸員の和田さんは、そぎ落とされた皮や肉片をボウルに集め、その後「調理して食べた!」とか。肉取り作業では、まさか和田さんが食べるとは思っていないため、その辺にトリあえず置いていた肉や、一度床に落ちた肉等も一緒にまとめていた。生ごみを出さないエコな精神。頑丈そうな胃腸。目じりのしわもホウレイ線もかなりキテルけど、だって、まだ自称・三十四歳だもの。若い。若い。和田さんにはこのまま、雲を突き抜けて銀河系の彼方まで、どこまでも突き進んで行っていただきたいと思った。ニワトリの頭は、ある程度肉を取り除いたところで薬品につけ、その時間を利用して館内と屋外施設の見学に行った。水につけて腐らせる装置も見学した。

見学後は、さらにキレイに肉取りをして、

虫ピンを使って発泡スチロールの台に固定した。みんなだいたいうまくできていたと思う。このときに、もともとの頭骨自体が歪んでいるものも発見された。帰宅後は、そのまま乾燥させた。

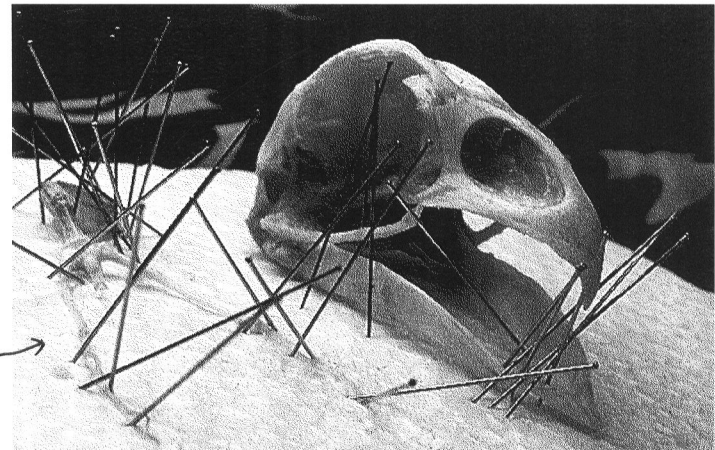


昔は、小学校高学年あたりでフナの解剖があったらしい。しかし、最近は、理科の授業でも実験などが減っているのので、解剖どころか顕微鏡観察すら少ない。博物館でのこうした行事は、生物の勉強ができるよい機会だと思った。また来年もあれば参加したい。

おまもフタも
たいとほ
このことだ...



多田 (オーちゃん)



左:完成した標本



おまもフタも
たいとほ
このことだ...

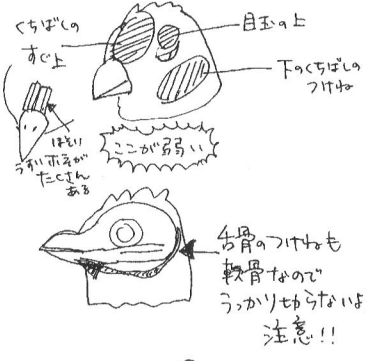
つくってみよう!

用意するもの

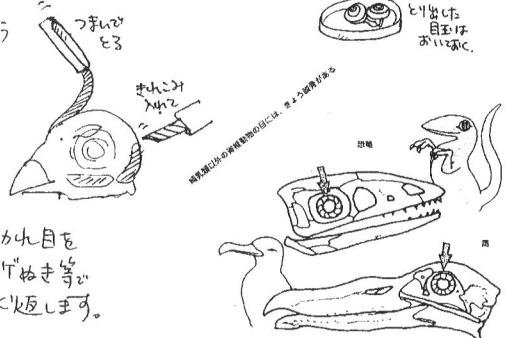
- ① はさみ ② ピンセット ③ 毛抜き ④ 毛抜き
- ⑤ 鶏の頭 (パート用エサとして売っている) ... 1コ
- ⑥ Xスリカッター ⑦ 毛抜きカッター
- ⑧ プラスチックのトレイ
- ⑨ 毛抜き針 ⑩ 標本針
- ⑪ 突込スチロロのてかたもの (頭の固定用)
- ⑫ 洗剤
- ⑬ 110イソ洗浄剤 (3~4倍にうすめた) 50-100cc
- ⑭ 酸化水素水 ... 4倍希釈 200cc (筆筒で洗ったものをうすめた) そのまま使う。
- ⑮ 歯間ブラシ ⑯ 試験管 ⑰ 洗い
- ⑱ 和紙、厚紙、アクリル板、透明テープ (眼球の強膜骨の固定用)
- ⑲ 瞬間接着剤
- ⑳ ビーカーなど
- ㉑ タイマー

ホネがしかり化しているから、なるべく**鷹鶏(大人)**の**豆貝**がいい

① 鶏の頭の皮を剥きます。骨が弱い部分を強くおさえて、Xスリカッターがよくなるように注意。



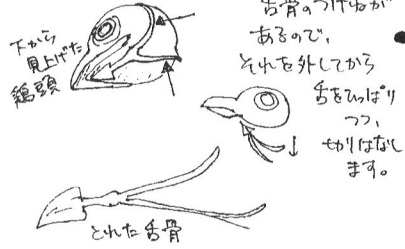
② 豆貝についている筋肉を少しずつつまみ取ります。Xスリカッターでせかゆ目を入れ、毛抜き、毛抜きカッター等をつまみ取る... をくり返します。



目玉の注意① 「骨を傷つけない」 ①の目玉はとて大きく、となりの目玉との間にはとて小さい骨の仕切りがあるので、この骨を傷つけないよう、さしこみピンセットの向きに気をつけてください。

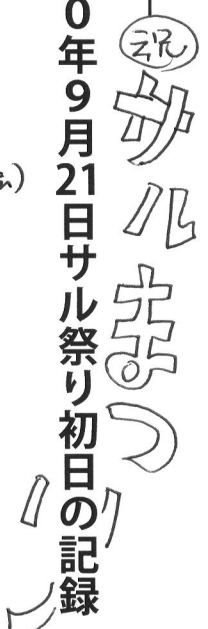
目玉の注意② 「眼球を破らない」 目玉はとて破れやすい、中に体液がたまりやすいので、この部分をなるべくこの袋のままとり出しましょう。とくに目にはあてず標本にくっつける眼球の骨(強膜骨)があるので、特に注意。

③ 舌を外します。後頭部によって2本の舌骨のつけかがあるのび、それを外してから舌をばりつ、切りはなします。



活動報告

2010年9月21日サル祭り初日の記録



昨年9月21-22日はひさかたぶりのサル祭りであった。サル祭りとは、冷凍庫に幽閉されていたサルたちを解き放ち、ハヌマーン神(ヒンドゥー教のサル神様)の怒りを鎮めるホネホネ団伝統の秘儀である。

秘儀であるからして団員限定はもとより、R(18指定(成人限定))というなにやらいかかわり、肉取りなど通常業務をされている団長たちを



上：井関団員撮影

手はわずか6名。少数精鋭と言えば聞こえは良いが、要は暇な大人が仕事をさぼって、あるいは仕事の一環として参集したのであった。ひねもす将棋をさしたり、甘いもんをねぶったり、事務局長に付きまといたりするよ

うな未熟者、不心得者はおらず、厳かな空気の中で祭りは始まった。



さて初日の供物は、シンオザル、フクロテナガザル、フランソワズルトン、ブラザゲンノンの4体。T動物園の贈答品で、いずれもレアーものである。全て動物園で剖検済なので、まずは人獣共通伝染病の恐れは低いとみた。ざっと俯瞰したところ、フクロテナガザルが高度の削瘦を示し、いかにも剥きやすそう。さてここで質問である。フクロテナガザルは分類学上、どのグループに入るか、次のなかから選択せよ。

- ① フクロオオカミ、フクロモモンガなどと同有袋類
- ② ホエザル、クモザル、オナガザルなどと同有尾猿
- ③ ゴリラ、チンパンジー、オランウータンと同じ無尾猿



正解は③。フクロはフクロでも有袋類の育児嚢ではなく「喉袋」。名前の元となった喉袋の軟骨構造をどうしても見たくって、著者はこいつをチョイスした。ところが、なんとしたことか！ 見たいものは皆同じで、すでに特徴ある喉頭軟骨が呼吸器ごとこっそり取り

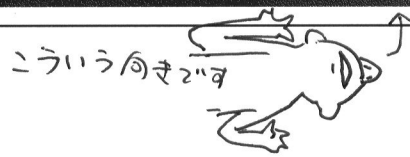
左：写真1 フクロテナガザルの喉袋



外されていたのである。悔し紛れに残っていた喉袋に手を入れて広げてみたところ、伸びること伸びること。容積になるとサルの頭など余裕ですっぽりと入る感じ(写真1)。Wiki先生によるとオスはここで声を反響させるらしく、共鳴嚢とも呼ばれている。加えて尻尾がないので他のサルと比べ手間が一つ少ないという特典つきである。賢いぞ自分！

剖検の際に頸部、胸腔、腹腔の内臓・器官が既に抜かれていたので、ひたすら胴部、手足、頭部の順に剥皮した。サルの解剖で目立つのは脂肪が黄色く、ヒトの死体そっくり。それは眼の位置が正眼視なので、頭部を剥くとカン見してくるのである。

泣きごととはさておいて本来の使命に戻り、皮を剥きつつ気がついた事を列記しておく



左・写真2 フクロテナガザルの手相



う。被毛はやや癖のある真っ黒い直毛。密度は高い。「サルはヒトより毛が三本足りない」という根拠は何だったんだ？ 残念なことにやけにシヨンベン臭い。マスクを透かして地下街をめぐらにするおじさんの香りがただよう。極度に痩せていることから慢性腎不全を患っていたのかと思ったが、組織や血液などからアンモニア臭はしない。おそらく死ぬ間際に失禁し被毛が汚れたのであろう。その最後を想えば同情の念を禁じ得ない。



真っ黒な毛に比べ体幹部の皮膚は概して色素沈着が弱く、初秋の陽に透かせば薄ら蒼く見える。一方、掌と足裏の皮膚はやや厚く肌色からこげ茶色の混ぜ混ぜで指紋や手相が見える(写真2)。「渦状紋、弓状紋、蹄状紋」とか「生命線、感情線、頭脳線」などヒト的

な模様はなく、モルグ街の鑑識や運命鑑定のおじさんは悩むだろうなく、なんて一人でニヤニヤしていた矢先、隣のグエノンだったかルトンだったか、「陰茎骨がある！」というお声があがった。



なんと自分認識で無いと思ひ込んでいた陰茎骨をサルどもが持っていた事に愕然とした。フクロテナガザルの亀頭部にもプツチリとした感触が指に伝わってくる。イヌやタヌキ、アライグマなどに比べれば実に華奢。ここからは先入観なく与えられたホネ神様の陰茎は秘かにかつ真摯に触診することとしよう。あくまでもアカデミックな立場である。変態などと決して誤解なきよう。



けつこう突けたのが尻胼。被毛はなく平たく角質化した厚い皮膚で覆われ、裏地にコラーゲンリッチなパッドが入っている。接する坐骨底面も律義に平たい。お尻の両ホツペにあるので、木の枝に座ると体重で挟み込むようになり、さぞかし座り心地が宜しかろう。ちよつと羨ましい。どうだろう、このような摩擦効果の高いパッド入り機能材料を左右の坐骨面に貼付した作業スポンを開発すれば森林業界、電力業界あるいは登山家の間で秘かなブームにならないだろうか？ CMキヤラはルパン三世。商標名は「モンキーパンツ」はい、滑ったあゝ。

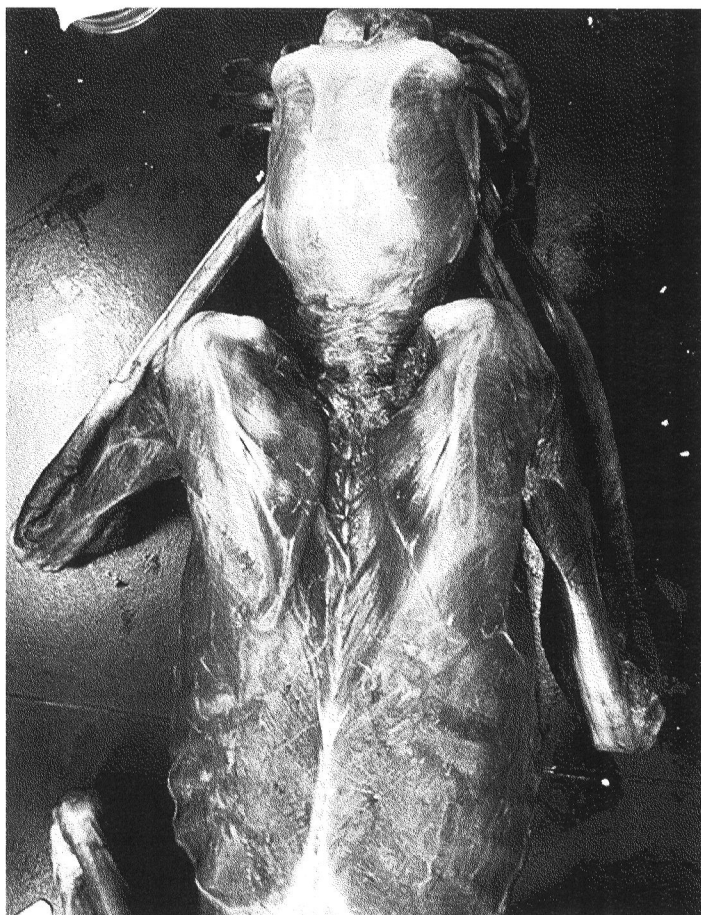


皮を剥き終わり寝かしてみるとテナガザルだけに腕はやたら長く、さらに自由度も高い

(写真3)。鎖骨も発達している。樹上生活に特化した種なんだな。最近、著者は五十肩が悪化し手を上げるとかなりの痛みを伴う。人喰い虎に追いかけても木に登れず哀れ餌食となり、結果として虎もバターにならない。樹上生活者にとって五十肩は致命的である。肘関節にも注目した。掌や前腕部を上向きに振るための霊長類のホツトスボットである。橈骨近位端が環状になって尺骨の近位端に嵌まり込み、車輪のように回転運動を行うことができる(車軸関節)。興味のある方は博物館第3展示室のサルやヒトのホネ神様をご覧ください。



このように秋の日長を一日、猿神様をいじ



上：写真3 剥き終わったフクロテナガザル



くり倒し、実に充実した一日であった。前夜祭も含めサル祭りには団長の同級生ミノル氏もわざわざ神奈川から駆け付けてくれた。著者としてはホネホネサミット以来である。ホネホネ団ではこのように素晴らしい人たちの出会いが数々待ちうけている。飽きっぽい著者が続けていられる理由の一つである。これからも様々な出会いを祈念して筆をおくこととしよう。

活動報告

ノサル祭り2日目



冷凍庫から引っ張り出されたときは、なにやら四角く整形された毛だらけの物体。それがマンドリル様だった。頑なに固くなっていた彼が、ついに真の姿を見せる日がやってきた。大人ホネホネ団二日目。すでに片足は剥けていたので、もう片足を佐竹さんが、左右の手を千葉から来ていた女性と分け合った。

か剥きやすい態勢を取ろうとする。右手で手を取り、左手でメスを握る私も大変だが、マンドリルもダンスに誘われてみたり、手旗信号を送ってみたり、降参してみたりと忙しい。ふさふさとした毛が全身を覆っているが、なぜか前腕だけ中途半端にハゲていた。注射でもするために剃られたんだらうか。腕は私よりも短い、はるかに太い。ムキムキな上腕だけみたら毛深いプロレスラーかと思う。手を取って動かすと、寝ぼけた赤ちゃんのようにそっと指を握ってくれる。ホネホネ団で僕と握手！ 普段は地上、寝るときは樹上らしいので、枝を握るために手の基本姿勢が「握

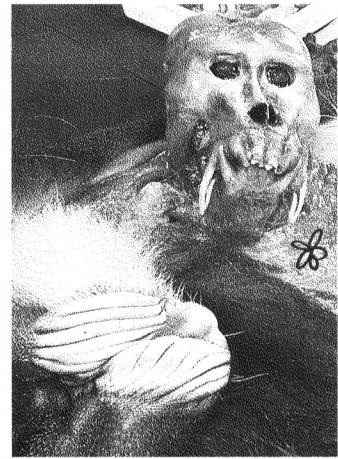
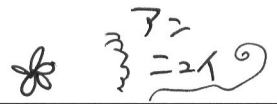


る」になっているんだらうかなどと考えつつ、指を剥こうとするとメスにまで握手を求めて来て邪魔なので、手首のところで腱を切る。平らな爪の周りを切りながら妙な気分になった。指が長く肉球がない。当たり前だけど、今まで剥いてきたどんな動物よりも、人間の手に似ている。

手を剥きおわり、いよいよ頭へ。その前に、作業しやすいように頭を切り：落と：せない。骨に当たるまではむしろ切りやすいが、頸骨が複雑に噛み合っていて、あと一歩の所で外れない。選手交代してみたり首をぐいぐいひねったりと二十分くらい格闘が続く。ついに頭が外れた時には歓声があがった。一休みがてら下半身を見に行くと、面白いことに気がついた。腰骨から骨が二本、椅子の脚のように突き出していて、その先の皮膚は脂肪がたっぷり詰まった尻パッドになっている。肉球を大きくしたみたい。いわば座布団付き座椅子をつけて歩いているわけで、これなら長時間地べたに座っていても苦にならないだらう。ちなみに、ニホンサルにも可愛らしい椅子がついていた。

この敵...ないから口を噛いたなる





二段構造だった。この部分は、皮膚と言うより薄めのプラスチックを整形してあるみたい。顔から剥がしても敵の形を保てるほど

しっかりしている。その下には硬く突き出た骨があった。鼻梁の両脇に高い突起が二列並んでいる。下手をしたら鼻よりも高い。「山の横線を歯の生え際、真ん中の縦線が鼻だと思ってもらえるといい。マンドリルやゴリラは目元が落ち窪んでいるせいで、いつも深刻に思い悩んでいるように見える。この眉間があまりに深く、掘っても掘っても先がある。皮を引っ張ってみてもその先端は眉間に吸い込まれていて、どこまで続くのか見えない。こんなに頭部でこずった相手は初めてだ。

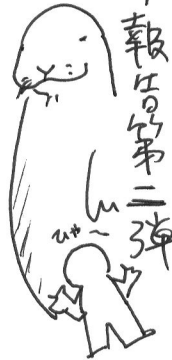
痴癪を起こして投げ出したくなるが、マンドリル氏のかっこいい顔に傷を残したくないので我慢。(たぶん) 無傷で向き終えた皮は、誰かが脱ぎ捨てた仮装用のマスクに見えた。

隣りの二ホンザルは、マンドリルに比べると感動するほど頭が小さく、可愛らしかった。まるで大人と赤ちゃんだ。ただし、筋肉を外してみると、頭骨の形は大きく違っていた。拳を作つてクマの耳にするつもりで頭に当ててみるといい。マンドリルのその辺りか

活動報告

大哺乳類展

東京遠征リポーター 報いの第二弾



5月21日、早朝から東京・上野の科学博物館へ行った。そう。大哺乳類展

なのだ。ホネホネ仲間が行くというので、あくる日(つまり23日)、観察会があるのでどうしようか迷ってたのだが、便乗した形である。今回は陸上の哺乳類。最大のアフリカゾウから、最小のチビトガリネズミまで、さらに過去に存在した化石獣の標本も含め、400点以上の剥製や骨格標本が展示された。さらに、著名なナチュラリスト、E・T・シートンの解説や絵画も展示、という、かなりなボリュームの展覧会だった。

まず、大型獣の剥製や骨格標本なんて作製するのは、かなり大変だろうな、と思った。我々も、キリンやシロクマ、イルカなどと格

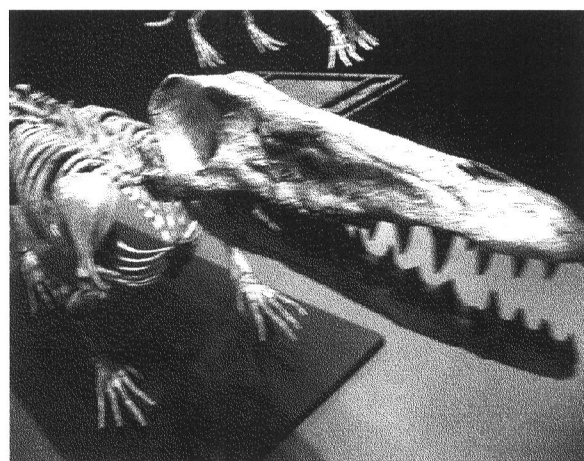
闘したことがあり、解体するだけでも大変だ、というのが実感できる。逆に、小型哺乳類の剥製も、これがまた大変なものである。チビトガリネズミなど、ほとんど大型昆虫のサイズだ。こんなどうやって皮を剥いたんだらう？

W・Tヨシモトという日系人のハンター。建設業の傍ら、世界各国で狩をし、その獲物を剥製としてコレクションされた方だが、日系人としての苦勞もされたようだ。その彼のコレクションも展示されていた。個人でこれだけやるのは並大抵じゃないだろう。そのバイタリテイにも驚かされた。星野道夫。写真家。特にカナダ、アラスカで、貴重な記録を取り続けた人だ。動物ばかりでなく、先住

民のインディアンやエスキモーの記録も撮られた方だ。そういった方々の紹介と展示もあり、日帰りがもったいない、と思うほどだった。

常設展示のほうも、2年前とはかなり変わっていて、というか、「生物多様性」を意識した展示になっていた。ただ、常設展の中には、若干解説が古いものも残っていたが。例えば、クジラ類が大哺乳類展では「鯨偶蹄目」となっているのに、常設展では「鯨は食肉目の一部から進化したと考えられる」となっていた。まあ、そこまで手が回らんかったんだらう。見終わつたあと、ホネホネのメンバーは団長の別荘へ。私は泣く泣く新幹線へ帰ってきた。

5月の大哺乳類展「陸の仲間達」に引き続き、「海の仲間達」もう終了間近、ということとで今日9月19日、行って来た。ものすごい



人、人、まあ、人も哺乳類ではあるが平日に休みとって行くべきだった、とちょっと後悔。しかしさすがは科学博物館。見ごたえのある展示。古代クジラ類だったというバキケトオウスやアンプロケトウス、なんてのは、多分ワニみたいに半分水に浸かって獲物

岩佐

活動報告

マッコウ掘りクリスマス

前号でマッコウクジラが埋められてからはや半年。そろそろホネになった

ない作業をするには好都合。寒いけど。

頃ということで、樽野顧問の指揮の下に12月24日〜25日の2日間にわたってマッコウ掘りが行われました。季節は冬、世間的にはクリスマスですが、ホネホネ団でも連日活動して祝う?のが恒例です。1日では終わりそうも

マッコウ掘りのためにはまず掘る場所と砂を退ける場所が必要です。砂場いっぱいに並べられたホネやホネになりかけの死体たちを片づけてから作業開始。24日はバラバラになった頭骨や上あご下あご、肩甲骨などを



右：発掘されたマッコウクジラの下あご



発掘しました。樽野顧問の地図どおりにホネが次々と出てきます。宝探してみたいで楽しい。砂を掘っていくとオオハネカクシがゾロゾロ出てきます。ルリエンマも出てきました。ホネの周りの砂は変色していてまだマッコウ脂が残っている様子です。そしてそこにはウジがわらわら。埋めるときに大量に蠢いていたホワイトエンジェルたちです。半年以上も真っ暗な砂の中で小さな生態系を築いていたとは驚き。



さて、最初にして最大の難関は上あごです。とにかく大きい、そして持ち上げると分解しそう。そういうば埋めるときも苦労して穴に収めたんだっけ。穴から巨大なホネを取り出すのは埋めるよりもっと大変。ホネの下を掘ってロープを通して、板で補強してなんとか無事に引き上げる。埋めるときにロープかネットかを引いておけばずいぶん楽になったはず。上あごは歯が抜け落ちないようにそっと取り出しました。歯の順番が狂わないようにその場で回収部隊が一本ずつ番号を振ってビニール袋に収めていきました。寒い中での作業、お疲れ様です。暗くなる前に終了して続きは翌日です。



25日は少数精鋭ということで樽野顧問、矢田部団員、筆者の3人でスタート。途中から舟越団員が参加です。とにかく寒い。1日目も寒かったです。2日目はバンバン雪が降ってきます。室内で作業している人にとっては素敵なホワイトクリスマスでしょうが、

砂場はさながらシベリアでの強制労働。砂をあっちへやりこっちへ移していると、頭の中で「映像の世紀」のBGMが鳴ります。しかしながら腕やヒレのホネ、長い肋骨を掘りだすのはまるで化石発掘。前日にもまして楽しい〜すごい寒いけど。最後に椎骨を前の方から順に取り出していきます。ところが、まるで腐った木の様にグズグズで、取り出す端からポロポロと崩れていきます。前の方はど状態が悪く、原型をとどめないほど崩れるものもありました。原因は何なんだろう。ここで意外に手間取った上に、クリスマスパーティーに向けて早仕舞をしなくてはならないので腰椎の一部〜尾椎を残して終了しました。樽野顧問によると尾椎はまだ肉が残っているかもしれないとのことです。



大物の掘り出しは重労働ですが楽しいですね！次はカバ掘りましょう、カバ！

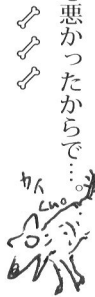


佐竹

活動報告

子どもが入団試験を受けました

2010年10月31日、ときどきの入団試験の朝を迎えました。はやる気持ちに白衣をふるわせつつ実習室へむかうと、3人の受験者を迎える3匹の狸ちゃんたちが…子ども(以下「よし」と表記)いわく「お母さん、狸ってよく死ぬんやなあ。」私「？」よし「だって3匹必要な時に3匹死んでるやん！」よしよ、それは受験者の為に必要な数を用意してくれた団員の皆さんのおかげじゃあ！ だって2匹は冷凍されていて、実習室で解凍されていたではないか！…というのは落ち着いてから推測した私の考えであって、その時の私はなかつ頭が真っ白のまま「うんうん。」とうなずいただけだった。頭が真っ白になっていたのは、冷凍されていたの狸ちゃん(もしくは自然解凍されていた)1匹の狸ちゃんが、カイセン虫(名前が間違っていたらごめんさい)に侵されており、毛が残っているのは頭部だけで、はなはだ肌の状態が見た目的にも悪かったからで…



先に着かれていた2人の受験者のかたは、2匹の冷凍狸を解凍されながら、体毛にくっついてるダニ等の採取に努めておられたので、我々もカイくん(勝手に命名。カイセンに侵されていたので)にじりより、ピンセット片手にダニを探す。素人の悲しさでみつける事は出来なかつたが、米澤副団長の「こん



なにカイセンに侵されているので、ダニにも見放されたのかも…」との言葉に、カイくんの病状に思いをはせる。また生息していたであろう地域と、肉片もサンプルとして保存されることを知り、後世に役立つ学術的な活動なんだなあと実感できた。



私はひそかに「カイくんは皮を剥ぎにくそうだな」他の狸ちゃんのほうがいいかもな」と思っていて、どの狸ちゃんを担当するか選択の時に「その狸(カイくん)でなく、こちらの(解凍中の)狸にしますか？」と聞いてくれた受験者のかたの言葉にありがたさを感じつつも、「逆に毛がない状態だからこそ、(カイくんは)やりやすいかも」という佐竹団員の言葉にぐらっとくる。よし「カイくん(で) やってみようか、なあ。」と腹をくくった時は「よし、よし、よし！」(心の叫び)とよし頼もしく感じられ嬉しかった。というのはカイくんの肌が、うちのペランダのプランターでよしの妹が育てていたミニトマトの茎にびっしりとくっついていて「何とも気持ち悪いイボイボ」に酷似しており、そのイボイボを凝視したよしは「気持ち悪いよ」と涙を流したのだった(当時12歳と2カ月)。その恐怖?を克服したかに見えるよしと、きれいな頭部を残していて、目を閉じた本当にあどけない表情をうかべた小柄な

カイくんの組み合わせは、私には「天の神様からの授かりもの」のようにうつった。本当は団長はじめ団員の皆さんのおかげなのだが…こうしてよしのながいながい入団試験がはじまった。



よしのメスさばきは当然のごとく慣れなくて危なっかしいものであるが、優しくて根気強く、丁寧に教えてくださる丹生団員のサポートを得て、たどたどしくも生き生きとカイくんの上をはしりはじめた。私は「よし、今日1日はよしのサポートに徹するぞ」と決めて、丹生団員がしてくださっているように、よしが作業しやすいようカイくんを動かしたり固定したり、皮にテンションをかけて(皮を引く張ることだと理解する。この表現は和田事務局長に教わった)剥きやすくなるようにしてみたかったが、またまた素人の悲しさで全く役に立たない。そこで写真を撮ったり時々よしの肩をもんだり、自分の知りたい事を丹生団員に質問したりした。(今から振り返るとそれはサポートではないと思う…)作業途中のエピソードを振り返ると…



④とても難しい指まわりの皮を剥く時は、「きれいに剥かせてあげたいな」。ぼくはここで失敗したことがあるんですよ」と言っていて、とくに丁寧に具体的な言葉かけをして下さっていた。また「達成感をね、味わせてあげたいなあ」とも言ってくれた。よしの体験を突のたにしてあげたいという、親心にまさるお気持ちを感じられ、横でいる私は終始感激していた。



①和田事務局長が手袋をしていない指で、つつつとカイくんの肌をなぞって、軽においを確認されていた。「く、くさいですか?」と聞くと「カイセンでやられている狸は独特の臭さがあるね」と言われたように思う。においも確認されるんだ〜と思った。



②よしのメスさばきが粗かつたりすると

「丁寧にね、ゆつくりでいいよ。(メスは)切れないように見えるけど、切れているからね」と丹生団員はくり返し言葉をかけてくれた(しかも常によしを切りやすいように皮にテンションをかけながら…)。



③ともすればよしは切ることに熱中してしまい、メスを握る右手に全神経が集中し、テンションをかける左手がお留守になる時があった。すると丹生団員はさりげなく左手の作業をうながし、なるべくよしが自分でするように誘導してくださっていた。親の子育てもこうありたいと感じさせてもらった。



⑤西澤団長からも、「わあっ試験だね。頑張つて!!」と、聞いているだけで元気がもらえるお声でありがたくも励ましていただいていた。



⑥昼食をとったが、よしは食べ終わるやいなや実習室へ戻る。好きなこと、やりたいことに熱中している時のひたむきさが白衣から

丹生団員の株上がりまくり!! えらいぞ!



2011年1月23日

⑧全長11cmのムシクイを剥くことは、メスを使って精密な彫刻をする感じだなあと思った。バンバン肉を剥ぎ取ってOK?だったウオンバットの肉とりとは対極にある感じだ。和田事務局長から貴重な説明を受けなが

ら「粉かけて...ティッシュをつけて...おわつ、羽が、羽がよごれるう(泣)」と呪文のように繰り返しながらユカちゃんも作業しているうちに何とか、私は睡魔におそわれてしまった。こんな所でこっくりしてはいけないと、食事が出来る部屋にいったん退却することに。



⑨少しすっきりして実習室に戻ると、小さな研究者のように集中しているユカちゃんの手によってすでにムシクイの頭部は処理されていた。これまたよし顔も上げずに「お母さんどこに行つてたん!?心配したぞ」と言う。30分くらい気を失っていた(寝ていた)ようである。ユカちゃんが最後まで処理したムシクイを「はい、どうぞ」と渡してくれた。よしに「ユカちゃんがやってくれたよ」と言うとお礼を言う。作業で揺れている背中が何だかかっこいい。一挙に5歳くらい成長した感じ。

⑩私が気を失っているあいだに、カイくんは皮むきは格段に進んでいて、尻尾も終わり(見損ねた・泣)最後の頭部にさしかかっていた。一人黙々と剥いてらした大人の受験者のかたは、大きなまるまるとした狸ちゃんの皮を見事に剥きおわり、祝福の拍手を受けてらした。書きもらしていたが、カイくんも大きく異なる点があった。それは2匹の狸ちゃん、剥かれた皮の下もさらにびっしりといった感じで白い脂肪でおおわれていた

れど、カイくんはよほど栄養状態が悪かったのであろう、白い脂肪は一片としてついていなかった。がりがりにやせていた、という感じであろう。それもよしにしてみたら、作業がしやすいことにつながったのかもしれない。

⑪「この入団試験は、上手に剥くかで合格を決める試験ではなく、一人でやりとげられるかをみる試験なんですよ」と丹生団員は言ってくれていた。よしにとつて最大の試験は、それまで目を閉じておだやかな表情だったカイくんが、頭部の皮をめくった時に、一転して怖く感じられたことだった。初めて「怖い」と小さくもらして手が止まった。あれほど自信にみちていた背中が、しゅううつと縮んでしまったようだった。丹生団員が「君がこうやって標本にしてあげること、この子(カイくん)の二度目の人生が、標本として半永久的に残ることが実現できるんだよ」と声かけて励ましてくれたのが、よしは嬉しかったそうである。私もとても嬉しかった!あらためてサポートしてくださった先輩団員のかたがたに感謝申し上げたい。

⑫午前10時30分頃から始まった試験も、いよいよ最後、カイくんの鼻のあたりの作業となり、夕方の5時になろうかという頃、見事に、見事に剥き終わった!!西澤団長がダッシュの勢いで実習台に来てくれ、カイくんにおおいかぶさるようにして、皮の剥き具合を見てくださる。そして大きな声で「よくでき

ています。合格です!!」と言ってくくださった時は、実習室中が拍手でわいた。私は思わずうるうるしてしまい、よしが「ありがとうごさいます。」と頭を下げていたように思うが、よく見えなかった。

⑬すっかり丸裸になったカイくんに「ありがとう」と二人で頭を下げる。そして長丁場とぎれることなくサポートしてくださり、よし以上に作業に集中してくださった丹生団員が「ハイタッチやる!」と言ってくださって、白衣の男二人が作業の名残りもみずみずしい?ラバー手袋をつけたまま、笑顔でハイタッチしていた。丹生団員とは今日初めて会ったのに...なんてことはホネホネ団では何の関係もないんだな。気持ちがあればその日からでも話ができて、一緒に活動できる。よしは素晴らしい人たちに出会えることができただ...と実感した。

⑭「あとの肉とりはやっておきますよ。」とのありがたい丹生団員のお言葉に甘えて、お先に失礼した小学6年生がすっきり暗くなった外に出ると、かなりの雨が降っていた。夫に車での迎えを頼んで、お向かいの「すき家」で待つことに。白ご飯、きんぴら、キムチにお漬物が、その時よしを食べることが出来た品々である。しかし食べている途中でカイくんの思い出がよみがえり、「くさい!くさいよ!」と店内で叫んだ彼の姿は、ミニトマトのいぼいぼに恐怖した時のよしのままだった。(やれやれ)



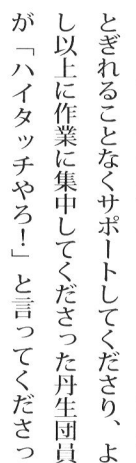
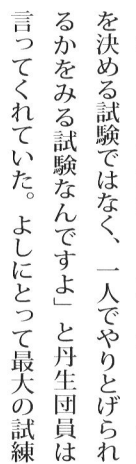
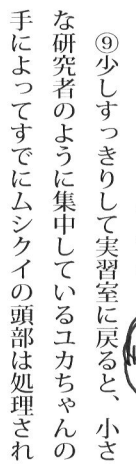
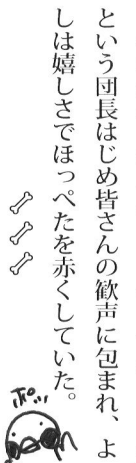
⑦また、自宅の近くで拾ったメボソムシクイ(我々はメジロだと勘違いしていた。鳥のエキスパートと呼ばれる中学生の杉本団員に教えていただいた)も持参していた。鳥好き?と思われる小学生のユカ団員は、カイくんが剥かれていく様子を「いいな!狸またやりたいな!」と目をきらきらして見ている。よしに「ユカちゃんにムシクイやつてもらおう?」と聞くとふりむきもせず「うん。お願いしたい!」と何だか男らしく見える背中が答える。ユカちゃんにお願いすると「一緒にしよう?」と抗いがたい魅力的なお誘いの言葉が。かくて私も初・鳥さんの皮(羽?)剥きに挑戦することに(サポートはどこへやら...)

⑩私が気を失っているあいだに、カイくんは皮むきは格段に進んでいて、尻尾も終わり(見損ねた・泣)最後の頭部にさしかかっていた。一人黙々と剥いてらした大人の受験者のかたは、大きなまるまるとした狸ちゃんの皮を見事に剥きおわり、祝福の拍手を受けてらした。書きもらしていたが、カイくんも大きく異なる点があった。それは2匹の狸ちゃん、剥かれた皮の下もさらにびっしりといった感じで白い脂肪でおおわれていた

⑪「この入団試験は、上手に剥くかで合格を決める試験ではなく、一人でやりとげられるかをみる試験なんですよ」と丹生団員は言ってくれていた。よしにとつて最大の試験は、それまで目を閉じておだやかな表情だったカイくんが、頭部の皮をめくった時に、一転して怖く感じられたことだった。初めて「怖い」と小さくもらして手が止まった。あれほど自信にみちていた背中が、しゅううつと縮んでしまったようだった。丹生団員が「君がこうやって標本にしてあげること、この子(カイくん)の二度目の人生が、標本として半永久的に残ることが実現できるんだよ」と声かけて励ましてくれたのが、よしは嬉しかったそうである。私もとても嬉しかった!あらためてサポートしてくださった先輩団員のかたがたに感謝申し上げたい。

⑫午前10時30分頃から始まった試験も、いよいよ最後、カイくんの鼻のあたりの作業となり、夕方の5時になろうかという頃、見事に、見事に剥き終わった!!西澤団長がダッシュの勢いで実習台に来てくれ、カイくんにおおいかぶさるようにして、皮の剥き具合を見てくださる。そして大きな声で「よくでき

⑬すっかり丸裸になったカイくんに「ありがとう」と二人で頭を下げる。そして長丁場とぎれることなくサポートしてくださり、よし以上に作業に集中してくださった丹生団員が「ハイタッチやる!」と言ってくださって、白衣の男二人が作業の名残りもみずみずしい?ラバー手袋をつけたまま、笑顔でハイタッチしていた。丹生団員とは今日初めて会ったのに...なんてことはホネホネ団では何の関係もないんだな。気持ちがあればその日からでも話ができて、一緒に活動できる。よしは素晴らしい人たちに出会えることができただ...と実感した。



にじみでて伝わる。またこの日は夏休みの科学作品として作った「うさぎの部分骨格標本」をホネホネの皆さんに見ていただくよう持参していた。岩佐団員、植本団員、池内団員、乾団員、西澤団長にご助言いただいて作ったもので、平成22年猛暑の思い出が濃縮された逸品(自画自賛)である。実習室に持つていくやいなや「わああ!すごいね!」という団長はじめ皆さんの歓声に包まれ、よしは嬉しさでほつた赤くしていた。

⑨少しすっきりして実習室に戻ると、小さな研究者のように集中しているユカちゃんの手によってすでにムシクイの頭部は処理されていた。これまたよし顔も上げずに「お母さんどこに行つてたん!?心配したぞ」と言う。30分くらい気を失っていた(寝ていた)ようである。ユカちゃんが最後まで処理したムシクイを「はい、どうぞ」と渡してくれた。よしに「ユカちゃんがやってくれたよ」と言うとお礼を言う。作業で揺れている背中が何だかかっこいい。一挙に5歳くらい成長した感じ。

⑩私が気を失っているあいだに、カイくんは皮むきは格段に進んでいて、尻尾も終わり(見損ねた・泣)最後の頭部にさしかかっていた。一人黙々と剥いてらした大人の受験者のかたは、大きなまるまるとした狸ちゃんの皮を見事に剥きおわり、祝福の拍手を受けてらした。書きもらしていたが、カイくんも大きく異なる点があった。それは2匹の狸ちゃん、剥かれた皮の下もさらにびっしりといった感じで白い脂肪でおおわれていた

⑪「この入団試験は、上手に剥くかで合格を決める試験ではなく、一人でやりとげられるかをみる試験なんですよ」と丹生団員は言ってくれていた。よしにとつて最大の試験は、それまで目を閉じておだやかな表情だったカイくんが、頭部の皮をめくった時に、一転して怖く感じられたことだった。初めて「怖い」と小さくもらして手が止まった。あれほど自信にみちていた背中が、しゅううつと縮んでしまったようだった。丹生団員が「君がこうやって標本にしてあげること、この子(カイくん)の二度目の人生が、標本として半永久的に残ることが実現できるんだよ」と声かけて励ましてくれたのが、よしは嬉しかったそうである。私もとても嬉しかった!あらためてサポートしてくださった先輩団員のかたがたに感謝申し上げたい。

⑫午前10時30分頃から始まった試験も、いよいよ最後、カイくんの鼻のあたりの作業となり、夕方の5時になろうかという頃、見事に、見事に剥き終わった!!西澤団長がダッシュの勢いで実習台に来てくれ、カイくんにおおいかぶさるようにして、皮の剥き具合を見てくださる。そして大きな声で「よくでき

2011年1月23日

2011年1月23日

2011年1月23日

2011年1月23日

2011年1月23日



⑮晴れて団員となれたよしは、ホネホネに行くのが嬉しくて楽しくてたまらないようだ。「おれがさく求めてた所やねん〜!」と言っている。学校も時々つまらないとい、学校の先生にぶつぶつ文句を言う、思春期の入口にいる彼だが、ホネホネという新しいフィールドに無限の魅力を感じているようである。やりたいことをみつけた彼に、そういう子どもを笑って仲間に入れてくれたホネホネ団のみなさんに、心から、よかった、ありがとうでございます、と言いたい。



⑯今の私の課題は、「自分も試験を受けて団員にさせてもらうか」である。よしがフィールドを広げたように、自分も広げてみようか。。「もう一人で行かせたら?」と夫が言い、よしにたずねると、「一人で行けるけど、お母さんが来たら、共有出来るもんな。」とのこと。フィールドを広げる時がきたら、真剣に頑張りますので、よろしくお願いいたします。

小牧

追記 12月23日に入団試験を受けさせていただきました! 米澤副団長には、人生初となる「お腹を切つて、中身を出して」も教えていただきました。また親子二代にわたつて、丹生団員に懇切丁寧にサポートしていただきました。(ハイタッチもしました) おかげさまで合格させていただきました! ちなみに剥いたのはアライグマの注ちゃん(勝手に命名)です。ありがとうございました!!!

私物 標本

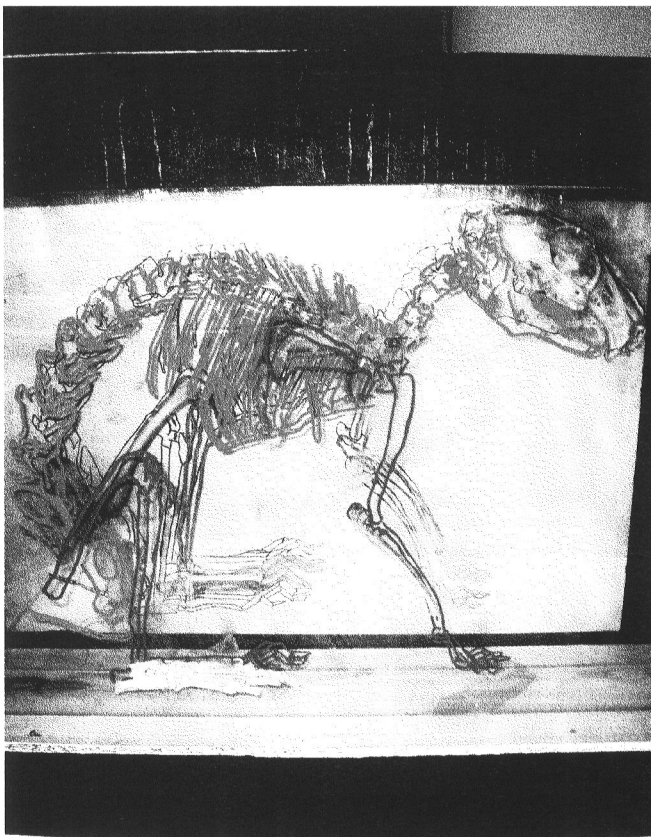
ホネホネ団には私物の標本を所有している方が多数いると思われます。拾ったホネや、組み立てたりもらったホネ、ホネにする予定の死体など。さまざまな私物標本も紹介していきたいと思ひます。

「うさぎの全身骨格標本への道」
うさぎの骨をみつけたのは、学校での委員会活動で飼育委員会に入っていた時です。土の中で死んだうさぎの骨が、部分的に、掃除していると土の上に出てきました。その時に骨に興味を持ち、岸和田の自然資料館に聞いて、渡辺克典先生にどの部位かなどを教えてもらいました。教えてもらおうと何回か自然資料館に行ったある時、ホネホネ団の岩佐さん、植本さん、池内さんが来ていて、アイデアを出してくれました。

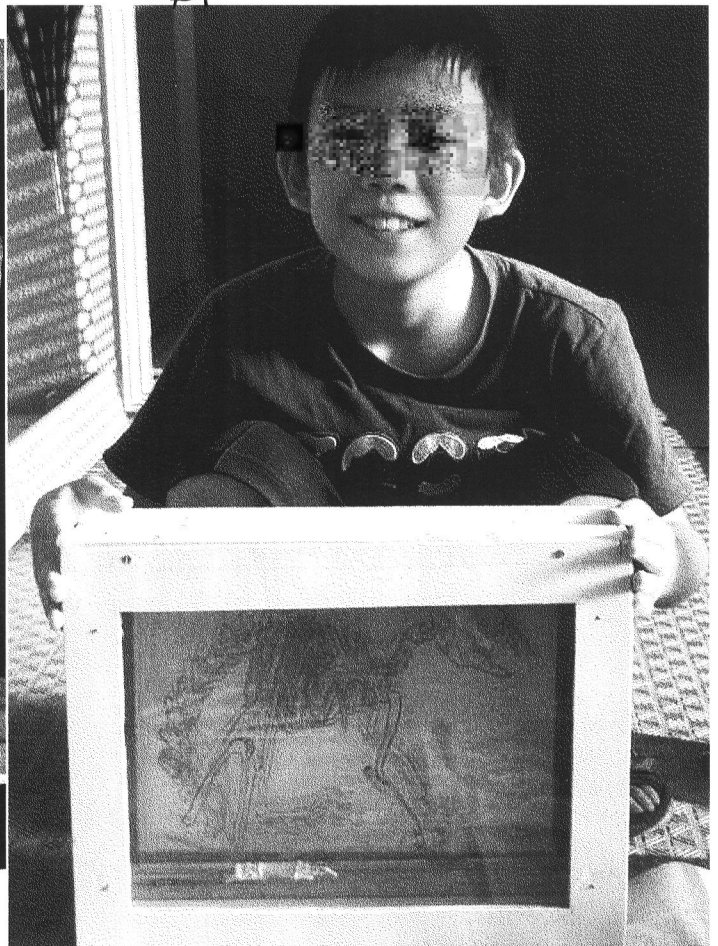


夏休みの自由研究として部分骨格標本を作りました。お父さんとケースを作り、お母さんとアクリル板に骨をはりました。ケースを木の板で作つたし、アクリル板をスライドできるようにしたので、すぐくカッコよくできました。また骨をみつめて、全身の骨格標本に近づきたいです。

小牧



手づくりの骨格標本。



取材記録と遠征報告

9月

【遠征】5日 東京都 世田谷区立砧図書館
ホネホネワークシヨップ(タヌキの頭骨お面作り)
参加者・団長

【遠征】6日 東京都八王子市 東京造形大学
ホネ撮影ワークシヨップ(フォトグラムでホネを撮る)
参加者・団長

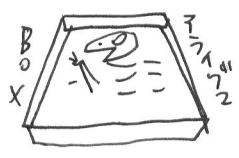
【遠征】10日 山口市 山口県立博物館
講演会とホネホネワークシヨップ(下顎レプリカづくり)
参加者・団長

【取材報告】高知新聞
シンポジウムの様子が掲載される
【遠征】24日 高知市 高知大学

シンポジウム「高知の自然の情報を記録する」ホネホネ団の活動報告と大石昂生団員の標本をずらつと展示。
参加者・団長・大石昂生一家

【取材報告】ケーブルテレビ
事務局長が対応?
11月

【取材報告】エフエフ東放(出演の打診)
【遠征】1日 滋賀県大津市 成安造形大学



出張授業でホネホネ団の紹介
参加者・団長
【遠征】13日 山口県周南市
周南市徳山動物園でワークシヨップ(ホネの観察と動物園の落し物集めとカレンダールづくり)
参加者・団長・田中歩団員・北野 団員・松浦 団員

【遠征】16日 京都市 京都精華大学
講演会でホネホネ団の紹介参加者・団長

【遠征】24日 京都市 京都大学付属病院小児科病棟
ホネホネワークシヨップ(動物園の骨をさわろう+頭骨ストラップづくり)
参加者・団長・河原 団員・ニジ団員・森下団員・舟越団員・河原 さん

【遠征】6日 和歌山県西牟婁郡白浜町
アオウミガメの死体回収
参加者・団長・事務局長
【遠征】11-12日 仙台市 アートミーツケア学会仙台大会
分科会で11月24日の小児科病棟での実践報告
参加者・団長・ニジ団員・河原 さん

【遠征】19日 豊中市 豊中市立岡町図書館
講演会とホネホネワークシヨップ(下顎レプリカづくり)
参加者・団長・橋団員・玉置団員・植本団員



遠征のお知らせ

1月16日

ホネホネワークシヨップ(鶏頭骨格標本づくり)
【行く人】団長、ニジ団員、森下団員、矢田部団員、佐竹 団員、佐竹 団員、丹生団員、浜口団員、岩佐団員、小牧 団員、小牧 団員
場所：岸和田市 きしわだ自然資料館

1月19日(水)午後
ワークシヨップ：シカ下顎レプリカづくり
場所：京都市/京都精華女子中学校高校
高校の生物部?に呼ばれてホネ作りします。
【行く人】団長

2月19日(土)
シンポジウム「臨床するアート」奈良セツシオン
場所：奈良市 財団法人たんぼの家アートセンターHANNA
【行く人】団長、河原 団員?、河原 さん

2月26-27日
ホネホネ合宿
場所：岐阜県各務原市アクアトぎふ 岐阜県関市岐阜県博物館
【行く人】団長、事務局長、橋団員、乾団員、阿久津団員、ニジ団員、久保 団員ほか

2月27日

ホネワークシヨップ
場所：兵庫県三田市 有馬富士自然学習センター
【行く人】副団長
3月2日(土)午後15時-17時
豊中市の理科教員研修会でホネ作りします。
場所：豊中市立第一中学校
【行く人】団長、ニジ団員

3月19日(土)午後
ホネホネ講演会(たぶん絵本づくりの話とか、ホネホネ団の話の予定。講演会では、絵本の販売を手伝ってもらえるとうれしい)
場所：東京都西東京市 多摩六都科学館
【行く人】団長

3月20日(日)午前10時-16時
ワークシヨップ：手羽先の骨格標本づくり
場所：東京都西東京市 多摩六都科学館
【行く人】団長、乾団員、ニジ団員

3月?
ホネホネワークシヨップがありそうです。
場所：大阪市立大学医学部付属病院





活動の成果

2010年9~12月

なにわホネホネ団

2010年9月23日 参加者数：33名

スズメ1体、ヒヨドリ1体、コゲラ1体、パラワンコクジャク1体、シロフクロウ1体、ヒメハリテンレック1体、バーバリーシープ1体、トムソングゼル2体、ニホンジカ頭2体の皮剥き。シロフクロウは洗った。
有蹄類の日。

2010年10月31日 参加者数：40名

メボソムシクイ1体、アカハラ1体、ムクドリ1体、シロフクロウ1体、アオサギ1体、オシドリ1体、ヒドリガモ1体、セグロカモメ2体、タヌキ4体、ウサギ1体、ブタ1体の皮剥き。シロフクロウは洗った。トカラヤギなどのホネ洗い。

入団試験以外には、ブタと鳥の皮剥きが目立った。シロフクロウはエマールで洗った。めっちゃフワフワ。

2010年11月29日 参加者数：6名

イノシシ1体、ハクセキレイ1体、コルリ1体、ムギマキ1体、キビタキ1体、シジュウカラ1体、クロジ1体の皮剥き。

ひさしぶりの団員限定の大人のホネホネ。定例の活動はバードフェスティバルに振り替えたので、これが今月唯一の活動。

2010年12月23日 参加者数：31名

ニホンジカ1体、スナドリネコ1体、タヌキ4体、アライグマ1体、ヌートリア1体の皮剥き。ニホンジカ1体、スナドリネコ1体の皮処理。アオウミガメ1体の解体。ツキノ

ワグマ3体の足先と頭骨とり。

ホネホネマラソン1日目。

2010年12月24日 参加者数：17名

タヌキ1体の皮剥き。ツキノワグマ3体の皮処理。ツキノワグマ1体の足先と頭骨とり。マッコウクジラ頭掘り。剥いたものの肉取り。

ホネホネマラソン2日目。団員限定の活動日。

2010年12月25日 参加者数：25名

ツキノワグマ1体、イノシシ1体、アナグマ1体、アライグマ1体、タヌキ5体の皮処理。ツキノワグマ1体の足先と頭骨とり。マッコウクジラ頭掘り。剥いたものの肉取り。ホネホネマラソン最終日。団員限定の活動日。クリスマスパーティー付き。

フシセント友換
もりあがまひ。



上：空気ポンプでウサギの皮を簡単に剥くぞ実験の様子



去年の感想・今年のご目標

団長的には

私物処理奨励

来年目標、授業を休まない!! 漢字の
おぼえり 冷凍庫はきれいになつたから
次は冷凍室をきれいにする

3回お風呂を
出さない
はかせ

日本スペースセンターに行こう。

松下

今年は大物が
たくさん来た!!
特にマコチは
すごかった!! (色
の味でついでに)
多田又佐竹

石研と博物館行事の両立
追加:ホネホネの遺産

byフナコシ

トイ熊を
仲よく
つなぐ

来年はステキな
拾い物がひらけます
よ)に by小橋
仕事を!! byみお
もって愛打
by大野

もっとマジメに
仕事します!!



ホネホネの団員
がんばる 森下

東京のホネホネ7-7を
あげるぞー!

クリスマス
110-ティーの
ときにかいてもらいました。



左:その隣では入団試験の真っ最中

2010年9月～2010年12月に入団試験に合格した方々です。

新入団員紹介

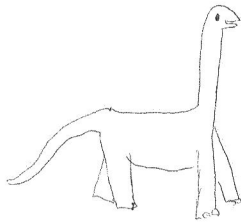
おめでとう!

- 団員 No.174 久保 さん ●団員 No.177 山村 さん ●団員 No.180 洲上 さん
- 団員 No.175 浜口 さん ●団員 No.178 都 さん ●団員 No.181 佐藤 さん
- 団員 No.176 小牧 さん ●団員 No.179 小牧 さん ●団員 No.182 佐藤 さん

ホネホネ団の踊り子

お名前: 久保

きょうりゅうから骨好きが始まりました。

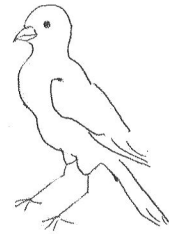


恐竜 VS 鳥

ホネホネ団のセキセイインコ

お名前: 浜口

鳥が好きです。彫刻をやっています。人見知りですが、よくおねがいします。



お名前: 小牧 (小6)

動物が好きで、骨興味を持ちました。ホネホネ団を招かいされて、実際に来て見ると、聞く物全てが勉強になり、入団したいと思いました。試験も受けて、きょうりゅうな骨好きで、肉球の所がつかめを残さないといけないので、すごく難しかったです。「合格」と言われた時に、がんばって良かった、と思いました。これから、よろしくお願ひします。



お名前: 山村

模型や、図面、などの建築的表現で製作活動をしています。今年骨や骨想をテーマとしておねがいします。

お名前: 都

ほねほね団 学んでみたいと思っておりました。よろしくお願ひいたします。

お名前: 小牧

ホネホネ団に入団 こまちゃんです♡ できましてうれしいです!! 岸和田在住の7/10(水)の日生まれ、A型。入団試験で初めて内臓を見る事が出ました。この手引きを抜いた時は「これは、おねがい事をしてる...」と思いました。団長はじめ団員の方々の指導に感謝です。これからよろしくお願ひいたします。

お名前： 佐藤

いろいろ (しほや手学など)
皮むきがわり うれしいです。
よろしくお願ひします

お名前： 佐藤

虫、みかん大好きです
1月2日生来
11歳

お名前： 淵上

現在は美術学校に通っています。自然物の輪郭を取り入れたデザインを学ぶ一環として骨に興味を持ちました。埼玉からの参加になりますので年に1、2回くらいしか参加できませんがどうぞよろしくお願ひします。



「頭骨コレクション」

骨が語る動物の暮らし」

福田史夫 [著]

築地書館 (2010/6/29)

ISBN978-4-8067-1402-6

死体を剥きながら蘊蓄を語ろう

哺乳類の頭骨についてさまざまな知識やエピソードをつめこんだ一冊。著者が所有する頭骨標本の写真が多数用いられていて、専

頭骨 コレクション

骨が語る
動物の暮らし

福田史夫



築地書館

門的な内容もとてもわかり易く解説されています。特に歯とアゴの構造や首の付き方については詳しく述べられていて、動物の種類とその暮らしぶりの違いがよくわかります。そして素晴らしいことに、ホネホネ団員はこれらの頭骨を実際に触ってみることができのです。皆さんにはおなじみのタヌキやアライグマの下あごの骨が左右に分かれているのはなぜか、なんでウサギの頭骨はもろいのかなど、本書を読めばホネホネ団の活動もさらに楽しくなります。死体を拾う時の苦労話は似たような経験のある方も多数いるのではないのでしょうか。でもホネホネ団員なら「全身拾おうよ」と思ってしまうかもしれません。本書を読んで入団試験中の人に、にわか仕込みの蘊蓄を自慢しよう。

佐竹ノ

広告

— 好評発売中! —

『獣の標本作成ガイド 解剖編』

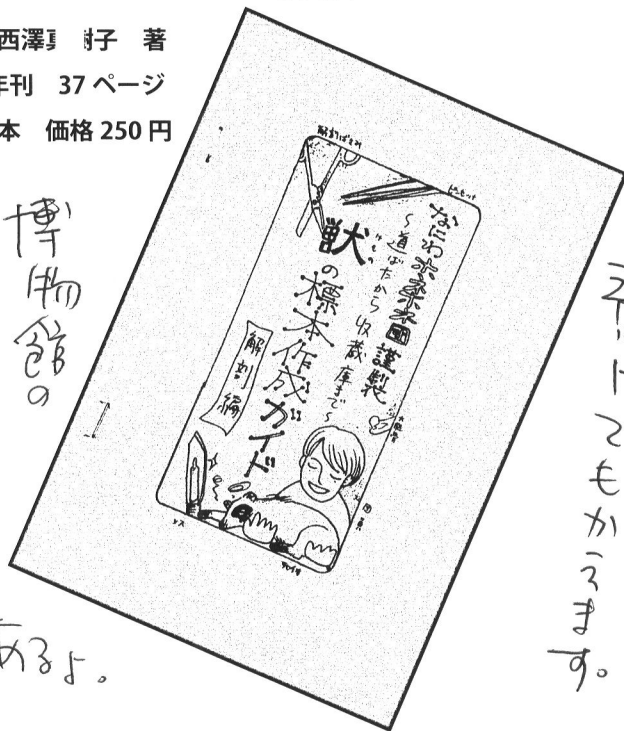
～道ばたから収蔵庫まで～

団長 西澤 好子 著

2005年刊 37ページ

簡易製本 価格 250円

博物館の
ミュージアムショップにあるよ。



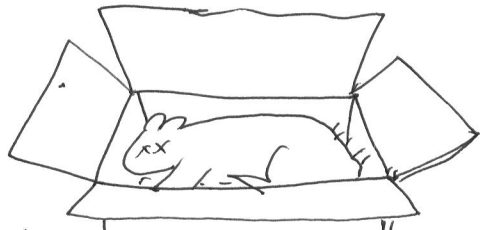
ネットでもかえりません。

なにわホネホネ団からのお願い

死体は重要な標本です。ぜひ回収して博物館まで届けてください。届けるときにはビニール袋で3重ぐらいにくるんでください。直接持ち込むほか、冷凍の宅配便も利用できます。着払いでも結構です。その際、内容は「標本」「サンプル」とお書き下さい。
送ったり、持ち込んだりするときには、ホネホネ団まで連絡をください。標本の採集日、採集場所（地図のコピーに印でOK）および採集者の名前を書いてメモを同封することを忘れなく！

お問い合わせ先

大阪市立自然史博物館
<http://www.mus-nh.city.osaka.jp>
動物研究室 和田学芸員
wadat@mus-nh.city.osaka.jp



編集後記

記事募集

バードフェスも無事に終わってなによりです。ホネホネ団に興味のある人がたくさん来てくれたので、見学者や入団希望者がまた一段と増えることでしょう。団員数も200人を超えそうな勢いですね。ホネ好きが世の中にこんなにたくさんいるとは驚きです。最近オープンした某大阪最大の書店の生物学関連の棚でも、ほねほね探検隊シリーズをはじめホネや標本関係の書籍が一番目立つ場所に並べられていました。その棚で「日本動物解剖図説」を発見して衝動買い。探せばまだまだ面白い本が出てきそうな本屋です。

12号は一応鳥特集のつもりでいたので、鶏頭の標本の作り方が載っています。やってみたいけど材料が手に入らないよって人は、日本橋の妙に中華なお土産物屋さんさんの2階に売っていますよ。すごく入り難い外観の店ですが、店内では生きた〇シガエルなんかも売っていて、大丈夫なのかと不安になります。

次号は遠征特集を予定しています。博物館での活動だけでなくホネホネ団はあちらこちらで発表したり、死体を拾ったり、標本をつくったりとさまざまな活動をしています。そんな世界を股にかける団員達の活躍を一挙に公開したいので、原稿を書いてください。お願いします。

ホネホネ団通信では、常に原稿を募集しています。原稿用紙半分程度の短いものから超大作まで幅広く受け付けています。手書きでもパソコンでもOK、イラストや写真もありです。投稿方法は電子メール、博物館へ郵送したり持つていく、活動日に手渡しなどです。送料や交通費は自己負担でお願いします。内容はホネに関すること全般ですが、例えば...

活動報告・活動日にこんな作業をした、ホネホネ団の活動でどこかに行った、ホネを見に行った、死体やホネを拾った、入団試験を受けたなど、何かしたら記事を書いてください。私物標本・個人で色々拾ったり組み立てたりしている方も多いと思います。拾ったホネ、組み立てたホネ、組立中のホネ、ホネにする予定の死体など、何か持っていたら写真とエピソードを寄せてください。

本紹介・ホネに関する本を紹介してください。読書感想文の宿題が出たら、ホネに関する本にして、ホネホネ団通信にも送ろう！
他にも編集から色々記事を依頼しますので皆様よろしくお願いいたします。

ご了承ください
作成の手間を省くために原稿の校正を編集が勝手にしています。大幅変更は投稿者に確認しますが、内容が変わらない程度であれば通知しないことがあります。

ホネホネ団通信編集 佐竹 誠
gcd03100@nifty.ne.jp